

発行 貫汪館
森本邦生
発行日 平成二十四年九月三十日
広島県廿日市市宮内一四八〇

昇級・昇段者審査結果

この度、二名の方がそれぞれ昇級・昇段されました。おめでとうございます。

昇段者（七月八日）

初段

三崎 俊広

昇級者（七月二十一日）

三級

向井 薫子

今回、昇級された向井薫子さんは、子供達の中でも、最も稽古量が充実しておられ、稽古に取り組む姿勢の真面目さも抜きんでておられます。稽古を休みがちな私は常々、尊敬の念を抱いて薫子さんの道場での所作を拝見しております。今回の昇級は薫子さんがされているひたむきな稽古の積み重ねの結果であると思います。年は親子ほど違いますが、これからも、良いお手本、目標とさせていただきます。

次に、初段に昇段された三崎さんは、柔術と合わせて、居合の稽古にも取り組まれております。道場での稽古、日常生活での稽古と指導された事に素直に従い、最近ますます上達をさ

れておられます。

また、京都の演武会等にも行かれ、さまざまな演武を見学する事で、「見る眼」も養われておられます。お仕事等でなかなか思うように稽古に來られない状況にありますが、道場では質の高い稽古をされ、指導される事をひとつも疎かにするまいとされています。非常に意識の高い方です。

今回、昇級・昇段されたお二人は、稽古も豊富です。合わせて、稽古に真面目に取り組まれ、指導には素直に従い、着実に上達をされています。

この度お二人の記事を書かせていただくに当たり、深く考えさせられたことがあります。それは、上級者の方や今回のお二人のように上達しようとする覚悟をもって稽古をするのか、それとも、いつかは上手くできるようなるだろうと、ダラダラと稽古をするのかという二通りの稽古へ臨む姿勢についてです。

私の稽古への取り組み方は後者なのでなかるうかとつくづく恥ずかしく思いました。

「初心に返って」と口で言うのは簡単ですが、実際の行動でそれを示すひたむきな稽古を積み重ねて行くのは至難の道です。上辺だけの薄っぺらな覚悟で歩むことは決してできません。本当に今回のお二人を見習いたいです。

最後に、稽古日数の関係で今回の昇級審査を受けられなかった子供達についてですが、以前に習ったはずの形をすっかり忘れてしまっている子供が多いようです。一度習った形、指導された事を忘れないようにして頂きたいと思えます。保護者の方にもご協力をよろしくお願い

たします。
（昇級・昇段者の論文が道場ホームページ「道標」8月1日、11日分に掲載されておりますので、ご一読ください。）

（文責 濱村多賀司）



貫汪館居合講習会（七月）

7月22日（日）に貫汪館主催の居合講習会が七尾中学校柔剣道場で開催されました。

当日は、遠くは神奈川をはじめとして他県からも沢山の方々に参加して頂きました。

今回の講習会の感想を、片岡七尾道場長と、柔術の西川さんにそれぞれお願いしました。今後の稽古の参考のため、講習会に参加されなかった方は、特に注意深くお読みください。

柔らかく歩く感覚の理解

今回のテーマは、「太刀打・詰合：居付きをなくすための稽古」ということで、無雙神傳英信流抜

刀兵法の二人一組で稽古する形の太刀打と詰合を中心に講習会が進められました。実際に太刀打ちに入る前に、ただ立つて歩くということから始まりました。立つ事、歩く事は、全ての基本です。全身を柔らかく、何処にも力み無く、中心で立ち、全てを床に預けたまま、そのまま柔らかく歩きます。外側を固めるのではなく、あくまでも地球の引力の線に沿ってです。皆さん始めは、難しそうにされていましたが、しばらく稽古をされて、無理無駄なく、柔らかく歩く感覚が理解できたことと思います。次に、その感覚をもったまま、

太刀打の稽古へと進みました。太刀打は、木刀を持ち二人一組で実際に打ち合う形です。しかし、皆さん木刀を持たれると、それだけで、手の内や、上半身、下半身が固くなり、先ほど稽古をした様に歩く事が出来なくなっていました。そして、切ることにとらわれ過ぎて、身体は固くなり動きに調和が見られなくなれる方もおられました。皆さん、木刀に居つき、切ることに居つかれ、動きが不自由にならている事に気づかれたと思います。次に稽古した詰合においても同じ様なことが見られました。最後に、大石神影流の表十本の内「よう剣」・「げつ剣」の稽古をして、今回の講習会を終えました。今回の講習会を通じて、皆さん自分の動きがいかに固く、あらゆる事に居つかれていると気づかれたことと思います。そして、どのようになれば、今回のテーマ「居付きをなくすための稽古」が出来るかを理解できたことと思います。

今回、皆さんが気づかれた事を忘れて、今後の稽古に生かしていただけならと思います。

（文責 片岡潤一）

居合講習会を通じての気付き

今回は、「太刀打、詰合」を中心に、居付きをなくすための動きについて稽古しました。形の稽古に入る前に、刀を持たない状態で、立姿勢、歩法、斬撃について御指導頂きました。この時、刀を持っていないにも関わらず、腕を上げ下げする際に肩に強張りが生じたり、それをなくそうと腰に力みが生じたりして、体全体がバラバラに動いていることに気がきました。頭で考えて修正するのはなく、出来る限り意識を膺下丹田に置くようにして、体全体を緩めることで少しは無理のない動きができるようになったと思つたのですが、実際に刀を持った途端最初の硬い動きに戻ってしまい、心の中の居付きを思い知らされました。太刀打の稽古においても、いかに居付きをなくし自由に動けるかを念頭に、何も考えないつもりでいました。しかし、いざ実際に相手を目の前にしてみると、どうしても相手の動きを待ち構え、体を固めて強張っている自分がいて、ここでも心の居付きが動きを邪魔していたように感じました。刀（木刀）だけを意識し過ぎるのを避け、体全体で動くよう心がけました所、



少しだけ楽に動けたような気がしました。ただし、早く力強い斬撃に対処する際に、少しでも刀を素早く動かしたいあまりに、肩から先の動きだけになってしまふことが多くなりました。まるで、冒頭の稽古で、何も持っていないのにも関わらず力みが生じて体全体がバラバラに動いてしまふ状態に逆戻りしてしまつたかのように感じました。次に稽古した詰合では、互いに座した状態から始まり、相手との距離も近いいため、無駄な動きをしないよう必要最小限の動きで打太刀を制することを意識して稽古致しました。満足できる動きにはほど遠かったのですが、肩や足など、体のどこか1箇所が緊張するようになるとは少なかったように思います。一日の稽古を通して、改めて思ったのは、心の居付きをなくすことと、体を強張らせずに緩めることは繋がっているということでした。心身は表裏一体のもので、体が固くなれば心も固まり、心が居付いては体も自由に動けないことが、太刀打、詰合の稽古を通してより良く実感することができました。この感覚を日々の稽古においても、気を付けるようにして、精進したいと思います。

(文責 西川 朋樹)



沼田歴史散歩の会招待講演

『難波一甫流と宇高家について』

平成24年8月22日(水)、広島市安佐南区の沼田公民館において、森本先生の講演会が行われました。

この度の講演は、「沼田歴史散歩の会」の皆さんのお招きによるもので、私達が学んでいる澁川一流柔術の源流の一つである難波一甫流と、この流派を江戸時代初期に沼田郡阿戸村(現在の広島市安佐南区沼田町大字阿戸)に伝えた宇高家の人々を軸に、当時の広島藩で行われていた武術流派の状況、また幕末にかけ、どのようにして武士階級にとどまらず、広範囲にわたって農民の間にも難波一甫流が広まっていったのかの解説が行われました。



(大塚観音堂)

その中で、広島市安佐南区沼田町に現存する大塚観音堂と同所に安置されており、広島県内でもとても希少な、鎌倉時代初期までに製作されたとされる木造観音立像と当時の難波一甫流の師範との深く神秘的な関わりも説明されまし

た。

その他、広島県の無形文化財である阿戸神楽の形に宇高家の影響で柔術の技が取り入れられている等のエピソードも発表されました。これらのことから当時の武術は信仰や生活風土、更には社会情勢とも密接に関係しあっていたことがうかがえます。今回、講演会の資料を拝見させていただき、あらためて自分が修行している武術は様々な歴史の上に成り立っているということ垣間見ることができました。また、このような史実を学ぶことも重要な稽古の一つであるということも認識しました。

早速、先人の方々の息吹が残る阿戸の地を訪れてみようと思います。

(文責 濱村多賀司)



(阿刀明神社参道入口)

日本武道学会第45回大会

『練兵館 斎藤弥九郎の野試合について』

平成24年9月6日、7日の2日間、東京農工大学小金井キャンパスにおいて、日本武道学会が開催され、森本先生より、表題の研究論文が発表されました。日本武道学会は、昭和43年に設立され、高校・大学の武道教員や各種武道団体の研究部門とが連携して、第1回の大会が行

なわれました。45回目を迎えた今回も柔道や剣道などの現代武道や古武術について、歴史や科学、指導法の観点から、様々な論文が発表されました。

今発表では「練兵館 斎藤弥九郎の野試合について」というテーマで、幕末の開国期において、斎藤弥九郎(江戸時代後期の神道無念流の剣術家。幕末に江戸三大道場と言われた練兵館の創始者)によって行われた野試合が、どのような意義をもつものであったかの解説がなされました。

はじめに、第二次長州征討後の坂本龍馬の書簡に示された「銃を捨てる」という記述から、幕末期の戦闘では、敵と間近になった際には銃は捨て、刀を用いての戦闘形態がとられており、銃口に短剣を装着した銃剣は、白兵戦では用いられていなかった点が紹介されました。続いて、斎藤弥九郎が行なった野試合が、西洋銃陣によって両軍が対陣する先進的な形をとりながらも、最終的には短兵接戦における剣術の稽古による「練兵」を目的としていた事、その具体的な編成と進行方法とともに剣術試合の規則の説明がなされました。さらに当時の西洋に対して持たれていた、火砲第一主義という偏見の下に、当時の日本で醸成された「敵の懐に入りさえすれば」といった極端な短兵接戦主義についての解説がなされました。また、銃剣の使用に対する当時の反応も紹介されました。そして、まとめとして、こうした時代背景の中、斎藤弥九郎がその野試合において、旧来のものを西洋砲術の時代に合うよう西洋銃陣を取り入れるなどして作り変え「極端な短兵接戦主義」を廃した事、最終局面では銃手が刀を取り日本古来の剣術で勝負を挑むという戦闘形態を確立した事に意義があるとの解説がなされ、発表が締めくくられました。

資料を拝見し、自分なりに先生の発表を咀嚼したつもりですが、正しく読み取れていない箇所もあるかと思えます。先生の論文の詳細につきましては、

貫汪館ホームページの「道標」(9月10日から11回の連載)に掲載されておりますので、御覧頂き、より理解を深めて頂ければと思います。

(文責 西川朋樹)

稽古納め

連日の厳しい暑さも漸く和らぎはじめ過ぎしやすい季節となりました。早いもので今年も残すところ3か月となり、本年も廿日市天満宮での奉納演武をもちまして貫汪館の稽古納めとなります。普段の道場での稽古は言うまでもなく、年頭に新たな気持ちで臨む「稽古初め」と、一年の稽古の成果を奉納する「稽古納め」は道場において、とても重要な行事です。「稽古納め」と「稽古初め」の日時については事前にお知らせされております。極力、お仕事等のご予定と重複することの無いようにスケジュールの調整をよろしくお願ひ致します。

(文責 竹林哲也)

貫汪館平成24年行事予定

- 十一月三日(土) 明治神宮奉納日本古武道大会 (日本古武道振興会主催)
- 十一月 居合講習会
- 十二月 日本武道学会中四国支部会
- 十二月十五日(土) 柔術昇級審査会
- 十二月十六日 稽古納め
- 廿日市天満宮奉納演武会